

## 川崎ジュニア文化大賞受賞作品

### 通り過ぎる町から飛び立つ町へ

梶ヶ谷小学校 6年生 赤嶺 志帆

最近の私は、江戸時代に夢中になっています。江戸時代を舞台とした小説を読みすぎたせいでしょうか、お風呂の中での空想遊びでは、私は江戸時代の小間物問屋の看板娘、お松となって、墨田川近くの桜を見に行ったり、手習いの帰り道にある、橋のたもとの屋台の稲荷寿司をつまんだりしています。そう空想しているうちに、川崎の歴史にも興味がわき、江戸時代の川崎についていろいろと調べてみることにしました。

川崎の歴史は、江戸時代の初めに、東海道の品川宿と神奈川宿の間の宿場として始まりました。その当時の様子を表した地図を見てみると、江戸からのびるいくつもの道が川崎を通っていることがわかります。一番内陸側にあるのは、津久井往還で、三軒茶屋から分かれた道が登戸で多摩川を渡っています。今の世田谷通りです。三軒茶屋から分かれるもう一つの道が矢倉沢往還で、大山街道、現在の国道246号線です。二子玉川で多摩川を越え、溝の口を通ります。私の家のすぐ近くを走る通りです。さらに中原街道が丸子から小杉を通り、鎌倉道が平間で川を越えます。そして海沿いの道が東海道となります。

こうして地図を見ながらいつものように空想が広がります。近郊でとれた野菜をかついだ農民が渡し船で多摩川を渡ったり、急ぎ足の商人が江戸を目指したり、裕福な商人がのんびりと大山の阿夫利神社を目指したりして溝の口を歩いているでしょうし、東海道には参勤交代の大名行列も見られることでしょう。今度は私は宿屋の看板娘として旅人の世話をしています。京都のめずらしい話を聞いたり、江戸の最新の流行を聞いたりしていることでしょう。そこで行ったことのない土地の話に目を輝かせていると思います。そして私はあることに気がつきました。川崎は、江戸と神奈川静岡方面を往復する際には必ず通る町だということに。様々な物や人や情報がこの町を行き交うことで発展してきた町なんだろうと思いました。

今、ダイバーシティ、多様性という言葉がよく聞かれます。様々な人間が多様な価値観を認め合うことはとても大切です。川崎は、それこそ江戸時代から様々な人が様々な価値観を持ち寄ってできた町なのだと思います。

今まで私は、自分の住む川崎という町をあまり詳しくは知りませんでした。自分の住む宮前区は緑と住宅が多い地域で、そこに暮らす私には臨海部の工業地帯は別の世界のように思っていましたし、歴史で東海道が出てきても、それが自分の住む町とは関係ないと思っていました。でもこうして歴史をさかのぼることで、川崎全体が自分の町のような感じがしてきます。

江戸の昔から、ここ川崎は多くの人が通り過ぎることで発展してきました。様々

な意図を持った人々が、川崎で新たな思いを手に入れて、それぞれの目的地へと散っていったのだと思います。また、この地で生まれ育った人々も、そうした人々から刺激を受けて、川崎から外へと飛び出していったことでしょう。私もその一人として、ここ川崎から自分の未来へと飛び出していけたらと思います。